

人に対しては、仏様のような人でありたいと思うきっかけは？

これは両親のおかげですね。両親は、私が生まれたころはかなり裕福な生活をしておりまして、十一歳で疎開をする前までは何でもあって、ないものがないという家でした。ところが戦争ですべてを失って、岐阜県の山奥へ疎開をいたしました。その疎開先で本当に惨めな生活に陥ったわけですけども、いつも環境をきれいにしていたために、貧しくはあっても惨めにはならなかったですね。そういうことから、人間は貧しくあっても惨めになるような生き方をしない。どうしたらそうなるのか、と言いますと、人に対して粗暴、粗野なことをしたり、人の嫌がることをすると、人間の心はますます荒れていきますね。自分も惨めになっていきます。一方、自分が苦しくて、できれば自分ができる範囲で温かい対応をしていくと、自分の心にもゆとりが沸いてくるんです。

仏様のような生き方をしていくと

昭和36年10月10日に自転車で行商を始めたんですけども、翌年の二月、みぞれが降る寒い日に私は、いつものように自転車で荷物を積んで歩いていました。新宿の角筈（現在は西新宿）に小さなお店がありまして、そのお店に入ろうとしたんです。お店の中はストーブでもの凄く暖かいとみえて、ガラスがくもっちゃって中が見えないんです。そういう日は、カッパを着ているとしずくが垂れますから、なかなか入りにくいんです。中の様子を

見て入れそうなら入ろうと思って、恐る恐るドアを開けたんですね。そしたら中から手が

出てきて、私のカッパの右の袖を掴んで、引っ張ってくれたんです。私の頭の上から「外は寒いでしょう。お入りなさい」と言っています。こんな恰好でいいかなあと思ったんですけども、力強く引っ張られて中に入りました。中はストーブが燃えて、もの凄く暖かかったです。その方は上着を脱いでワイシャツ、ネクタイ姿でした。なんとその方が私の濡れたカッパの上から肩を抱いて、ストーブが燃えている奥に連れて行ってくださったんです。「手が冷たいでしょ、お当たりなさい」と。そして台の上にあった団子を一本取って「おあがりなさい」と言ってくださったんです。私はそれをいただいて、「ありがとうございます」と言おうとしたんですけども、声が出なかったですね。私は団子を持って、頭を三度も四度も下げるより気持ちを表すことができなかつたです。「私もこの人のようにならう」、そう思いました。断られても断られても通っていますと、先方が困ったことに出くわすことがあるんですね。たとえばお客様から〇〇がほしいと言われて探してもなかった。そうしますと、それがあるかどうかかわらなくても、私がそれを探して持って行くと、「これだ、よく探してきたな」と言ってくださって、そういうようなところから窓口が開いて一件、また一件と開いていったわけですね。

便教会新聞

第134号

平成30年新年

共働

便教会は、教師の教師のためのトイレ掃除に学ぶ会です。「方法論や技術や手法ではない、ただ身を低くして実践あるのみ」の教育方針で、自らの人格を高めることを目的としています。

便教会新聞発行責任者 高野修滋
〒四四五-〇八〇二 愛知県西尾市米津町天竺桂二七
T/F 〇五六三-五六四三二七
携帯 090-4215-1727

『掃除に学ぶ』

(愛媛県) 新居浜市立角野小学校
教諭 眞鍋 裕介

「掃除で教師が変わる」

教師生活十年が過ぎました。夢にも思いませんでしたが、十一年目にして初の小学校勤務をしています。この十年教師として何に力を入れてきましたか？と聞かれたら「掃除」と「道徳」と答えます。専門教科よりも力を入れてきたと言っても過言ではありません。

「掃除ができる人はなんでもできる、掃除ができない人は何もできない」。私の教師人生の軸を掃除に傾けてくださった先輩教諭の教室に貼ってあった言葉です。信念も、志もなく、あまり気持ちで教師をしていた自分は、一年目、担任をしたクラスが学級崩壊寸前の状態になりました。その先輩教諭は一言「俺のクラスの掃除を見に来い」と言ってくれました。「なぜ掃除？」と思いつながら見に行くと、教室で黙々と掃除をしている生徒の姿がありました。「なんで先生のクラスの子はあんなに一所懸命掃除するんですか？」と聞くと「悔しいか？」と言われたので「悔しいです」と素直に答えました。「悔しかったら（お前が掃除を）やってみろ」と言われました。とにかく悔しかったので、その日から「だ

まってやりなさい。ここがまだできてない。」などと言うのをやめて、自分が掃除に取り組むことにしました。数か月たち何度かその先生のクラスを覗きに行かせていただき、あることに気がきました。その先生はいつ見ても黙って一緒に膝をつき、腕をまくり、黙々と掃除をしているのです。誰よりも一所懸命掃除に取り組んでいる姿は、誰が見てもわかるものでした。教えることは心と姿で見せること。大切だと子供に伝えたいことは、自分も大切にしなければならぬと背中教えていただきました。この出逢いがなければ今の教師としての自分はいないと思います。これが私の原点です。

「掃除で子どもが変わる」

掃除を大切にできるようになって、子どもの変化に気付くことが増えました。たった十分の掃除の時間ですが子どもに気付かせてもらい、感動させてもらうことがいっぱいあります。今年、クラスの女の子（小五）が黒板掃除で、チョークを一本一本きれいに雑巾で拭いてくれました。「なんで？」と聞くと「粉がついていて」先生の手が汚れるから」と言ってくれ、その心遣いに感動しました。しかし、授業でそのチョークで字を書くと、少し濡れているせいか、いつもと違う変な色になってしまいました。

【編集後記】今号のお二人、眞鍋裕介先生、場谷翔汰先生に共通することばは、「気づき」

「変わる」。便教会の趣旨書には『教師が変われば子供が変わり、子供が変われば学校が変わる』と言われますが、全国には本当に素敵な先生方が、それこそ「一隅を照らす」想いで「トイレ掃除」に取り組まれ、驚くべき実績を上げておられます。『とあります。その便教会活動の原点は「方法論や技術や手法ではない、ただ身を低くして実践あるのみ」」。鍵山秀三郎相談役は『故・森 信三先生が、「実践しなくても判る程度の道理は、大したものではありません。自ら苦労してやってみない限り、真理の門は開かれるものではありません。』と説かれましたが、実践を通して学んだ真理を、教育に、また社会に広めていくために、「便教会」を守り育てていただきたく存じます。』と推薦してくださいました。「掃除に学ぶ」活動が教育現場に広まる、社会に広まる、市民運動、国民運動となるには長い道のりですが、「世の中から心の荒みをなくす」願いを込めて始めたこの活動、鍵山相談役はじめ多くの諸先輩方のご尽力を無にするわけにはいきません。掃除に学ぶ会と便教会が一体となって次世代を担う若者たちに「掃除の魅力」「掃除の素晴らしさ」を伝えて参りましょう。一人にできることは小さなことですが、二人、三人、百人となれば大きな力となります。「広めていく」という覚悟と実践で仲間を増やしましょう。

高野修滋 拜

周囲の反応もあり、その女の子がっかりした顔をしていたのを覚えています。次の日、その子はチョークを拭くのをやめてしまいました。しかし、その次の日、その子は両手の掌でチョークを挟み、こすりながら素手で粉を落としていました。両手は粉だらけ。でもチョークはともきれいになっていました。その子の心の美しさを感じ、本当に心から感動し、有難うと伝えました。その時の嬉しそうな顔もまた覚えています。その姿に出逢えたこと、その姿や変化に気付けたこと、その姿で感動できたのも掃除を大切にして続けてきたからこそだと信じています。掃除の大切さを伝え、共に掃除に取り組めば、掃除を通して子どもは日々変化、成長していくと実感しました。

「便教会、愛媛掃除に学ぶ会に出逢い、愛媛便教会を立ち上げて」

便教会に参加させていただくようになり、本当に有難いと感じることは出逢いです。便教会やお掃除を通して出逢う人は皆、心温かく、何よりも笑顔が素敵です。その行動力や熱意、掃除に対する心や志、行動、技にいつも新しい刺激をうけ心が揺さぶられます。普通に過ごしていれば出逢うはずがない人との出逢い。今まで一点も交わらなかった人が掃除を通して出逢い、

その日に掃除を通して心を交わす。逢ったこともないのに、逢ったことがあるようなそんな感覚をよく味わいます。便教会に参加すると、「心が変われば、行動が変わる。行動が変われば、習慣が変わる。習慣が変われば、人格が変わる。人格が変われば、出逢いが変わる。出逢いが変われば、運命が変わる。運命が変われば、人生が変わる」の言葉がとても腑に落ちます。私にとって人生最大の出逢いは妻です。冗談ではなく本当です。狭い世界で掃除をしていた自分が、眞鍋真理子（旧姓三上）のおかげで便教会と出逢い、世界が広がり、皆様と出逢えて、こうしてともに掃除をし、便教会新聞の原稿を書かせていただいているわけです。あの行動力と熱意は本当に尊敬します。

さて平成二十九年三月十九日に皆様のご協力をいただいて立ち上げた愛媛便教会ですが、現在も月に一度私の赴任校でトイレ掃除が続いています。最初は家族三人だった会も、十一月には赴任校以外の先生も含め五名の先生が参加して下さいました。十二月には日本を美しくする会の四国ブロックで出逢った一般企業の方も参加して下さいました。本当に少しずつですが良縁が繋がり、広がってきています。一度ではなく何度も参加して下さいる先生もいます。愛知でも愛媛でも、きつとこの地でも、心強い仲間が必ずいるのだと思うと嬉しくなります。まもなく一年。大きな旗は振れませんが、同じ方向を向いている同志を見つけながら、子どもたちのために、愛媛便教会を細く長く続けていこうと決意を新たにしました。

えていない。でもやるしかない。そう覚悟して臨んだ。各班に分かれ持ち場につき、実際にトイレ掃除にとりかかってみると、忘れていた手順が次々と思ひ浮かぶ。高校時代にひたむきに取り組んでいたあの感覚がまだ残っていた。周りを見ると手順がわからず困っている仲間がいた。「サンドメッシュは目が粗いから、銀メッキをこすると剥がれちゃうよ。銀の部分はこの道具を使ってね。」「スポンジはひねるように絞るとちぎれちゃうから、圧縮するように絞ってね。」あの頃の高野先生のように、理由と一緒に教えるともんな理解して取り組んでいた。高校生の頃は自分のことで手一杯だったのに、大学生になった今は周りを見て声掛けができる。今まで教わる立場だったのに、今は教える立場になっている。自分自身で成長を感じると同時に、この機会を与えてくれた高野先生に感謝の気持ちでいっぱいになった。大学時代のトイレ掃除はこの回を含めて九州で三回、長期休暇で地元に戻省したときに二回と、高校時代に比べて回数には激減したものの、高野先生のおかげでトイレ掃除との縁を保つことができた。

大学を卒業し、地元に戻って高校の非常勤講師として働くことになった。私が大学生の間、地元では高野先生を中心に月に一回、地元の駅のトイレ掃除をする活動が始まっていた。仕事面では慣れない授業に悪戦苦闘の日々を過ごしていたけど、このトイレ掃除に参加することが自分自身を振り返ることになり、原点に立ち返る気持ちでまた一ヶ月頑張ることができた。はじめは月に一回の活動だったが、次第に掃除す

私自身がそうだったので、「トイレ掃除で教師が変わる」と信じています。

子どもたちをみていると、「トイレ掃除で子どもが変わる」と信じています。

ただ、私自身が未熟なので思いは熱くても、心と行動がまだまだ伴っていません。子どもの心に火をつけられる本物の教師を目指して、この先も皆様とともに頑張りたいと思います。よろしくお願いいたします。

『ともに歩む』

愛知県立豊田工業高校
講師 場谷 翔汰

私がトイレ掃除を始めてもう六年になる。最初の出逢いは西尾高校三年生のときだった。授業後何の気なく校舎を歩き、トイレの前でふとある光景を目にする。見慣れたトイレの前に見慣れた先生（高野先生）と見慣れない道具。よく見れば同級生も一緒にいる。何をしているのか見当もつかず、思わず立ち止まった。「今はトイレ使えないよ。ほかのとこ行って。」忙しそうに高野先生がそう言った。「なぜ先生がトイレ掃除をしているの？」「なぜ同級生も参加しているの？」「きれいに並べられた道具は何に使うの？」瞬時にさまざまな疑問が私の頭をよぎった。しかし、私の口から出たのは自分でも驚く言葉だった。「僕にも手伝わせてください。」混乱のなか、私はそう言った。学校のために何かしたかったのか、勉強から逃れたかったのか、理由は今でもわからない。

る駅がひとつ増え、地元の観光名所にも手を伸ばすようになり、にしお市民活動センターに「西尾を美しくする会」として登録、新たなスタートを切ることができた。高野先生の言葉に「きれいを広げる」という言葉がある。地元の駅のトイレを月に一回掃除するという小さな活動が、少しずつ、確実に広がっている。その活動に参加できる喜びをいつまでも感じながら仲間たちとともに掃除に励んでいきたい。

高校生のころに始めたトイレ掃除が今でも続いている。何をしてもこたわりすぎて三日坊主になってしまふ私にとって、この事実は大きな心の支えである。始めたばかりのころは大学の受験勉強から逃れたい一心でやっていたトイレ掃除が、暑い夏も寒い冬も地域の仲間が集まって同じ駅のトイレを掃除することで、今では心の支えになっている。

深刻ないじめや教員による不祥事がニュースで大きく取り上げられる昨今、日本人の心の余裕の無さを感じることもある。今振り返ると、高校生のころの自分は心に余裕がなかった。しかし、トイレ掃除を繰り返すうちにだんだん余裕が持てるようになってきた。私が講師として実際に教育現場に出て、教育には「ていねいさ」と「気づき」が必要だと常々感じている。生徒の些細な変化にすぐに「気づき」、生徒の気持ちに立って「ていねい」に接することが生徒を守ることにつながると思っている。トイレ掃除をしていると多くの「気づき」がある。道具をもつてしゃがんでみると、普段見えない汚れに気づく。掃除をする前と後で、トイレの空気の変

この日、この一言から私のトイレ掃除が始まった。高校卒業までは毎週水曜日の授業後、週に一回の活動であった。トイレ掃除には多くの手順がある。高野先生はその一つひとつを理由と一緒に教えてくれた。私は高野先生や同級生をまねて、ひたすら便器と向き合った。教師をめざし、大学受験の勉強に追われていた私にとって、週に一回のトイレ掃除は非日常で、唯一勉強のことを考えなくてよい時間だった。高校時代はそんな理由でただひたすら掃除をした。

高校を卒業し、四月から九州の大学に進学することになった。初めての一人暮らしになれない講義、新しい出逢いで毎日の生活が一変して、高校生の頃を思い出すことなどない日々が続いた。四年間の大学生活の半分が過ぎたころ、高校時代にお世話になった高野先生から連絡があった。「今年、長崎でお掃除しましょう。」びっくりした。まさか高野先生が九州にまで来てトイレ掃除をするなんて。一方、私はもうトイレ掃除を二年以上やっていない。「今更トイレ掃除なんて」という気持ちもあったが、「高野先生に会いたい」という気持ちで、日程を合わせ参加することになった。トイレ掃除当日、掃除の会場は中学校で、学校の先生や中学生も参加していた。高野先生と久しぶりの再会。私が高校生の頃より一層明るく元気で、どこかなつかしさを覚えた。「今日は初めてトイレ掃除をする人が多いから、場谷くん（私）が掃除の仕方を教えてあげてね。」高野先生にそう言われ、プレッシャーを感じた。二年以上のブランクがある。いつも高野先生や同級生のまねばかりであり覚

化に気づく。仲間と一緒にトイレ掃除をしていると、仲間の考えていることに気づく。気づいたことを一つひとつ「ていねい」に対応していくことで、自分自身で成長を感じる。トイレ掃除での気づきや成長は日常生活でも活きてくる。ゴミが落ちていれば街をきれいにするチャンスだと思ってゴミを拾う。困って立ち止まっている人がいれば、自分にできることがないか声をかける。どれも日常の些細なことだけど、些細なことを続けることが何より難しい。「凡事徹底」を胸にこれからも活動を続けていきたい。

『私の人生 その二』

日本を美しくする会
相談役 鍵山秀三郎

苦境の中、どうやって商品を買ってもらったんですか？

私は苦境を通して深く学んだことがあります。それは、世の中には本当の鬼ではないけども、鬼のような人がいっぱいいる。一方ごく僅かだけでも、仏様ではないけれども、仏様のような人もいらっしやう。私は、自分がどんなに辛くても、苦しんでも鬼のような対応を人にはしない。自分がどんな境遇にあつたとしても人にはしない。できれば、人には仏様のような人間として接するようにしたいと思っただけでも、実は、これは難しいんです。仏様のような人になる前に本当の仏様になってしまいうすです。